

## 2. 読み書き同時履修の誤り

林 巨樹 漢字を早く教へる方がいいといふのは問題ないのです。明治になって日本の学校制度を作った時、多分江戸時代の寺子屋からの伝統だったのでせうが仮名から教へて、それから漢字を教へる時に、読み書き併行履修<sup>へいかうりしゅう</sup>で出発してゐます。漢字は読めると同時に書くといふことになった。この書くといふところで字画の多いものは、指先も定まらないものには難しい。本当は平仮名<sup>ひらがな</sup>の方が難しいと思ひますが、字画の少ない方が易しい<sup>やさ</sup>といふ考へがあつて、現在のやうになった。読み書き併行履修といふ考へから発して、私たちもそれで育つてきたわけです。この併行履修の考へは石井先生の方法だとまづ捨てなければならぬのですが、覚える、読めるに限定して出発するわけですから、どこからそれを自分の表現に使ふか、書けるやうになるのか、その辺を教へていただきたいのです。

石井 私は昭和 28 年以来の実験で、この読み書き同時教育といふこと

が、字を書く学習を妨<sup>さまた</sup>げてゐるといふことを確認しました。読むといふのは理解行為で、書くといふのは表現行為です。十分に理解できてゐないものが表現できるはずかないし、また表現の意欲も湧<sup>わ</sup>くはずがない。それをまだ十分に読めない、理解も十分でないうちから表現の学習をさせても、子供たちにその意欲ができるわけがないし、従つてその教育が成功するはずがありません。ですから私は読み書き分離を考へてやってみました。十分に読めて、理解が深まって、それを書いてみたいといふ気が起るのを待つてその指導を始めれば容易に書けるやうになります。理解も十分でない、字形の認識も不十分な時に、一点一画みながら書くやうな学習は労<sup>らう</sup>ばかり多くて、いくらやっても書く力はつきません。無駄<sup>むだ</sup>であるばかりでなく、子供に挫折感<sup>させつかん</sup>を味ははせることになるのが恐ろしいと思ひます。

私はこのことを曾<sup>かつ</sup>て阿部吉雄先生(生前は東大教授・協議会理事・国語審議会委員)に申し上げて(昭和 30 年代の後半だったと思ひますが)、国語審議会で発言していただいたことが

あります。ところが読み書き同時といふのは明治以来採られてきた方針で今はもう議論の余地がないとされてしまったことがあります。

今でも小学校では読み書き同時で教育が進められていますが、これは子供にとって大変な負担です。字形が頭の中にはっきり思ひ浮べられるやうになるまで、書く学習を控へるべきです。